十文字学園女子大学講演会

『新しい時代に生きる子どもをどう育てるか ―教育における発想の転換―』(3)

首藤　美香子編

〈本田和子先生ご講演 ―前号よりの続き〉

子だくさん家庭の『こどもの天国』

ところが、九人のお子さんがいるお宅というのは、奥様が「しつけ」なんていうのをすっかり放棄してらっしゃるものですから、本当に楽しかったのです。私が、（お隣は）男のお子さんばかりですから、そんなに遊びに行かないんですけれども、雨の降る日曜日なんていうのは家にいて遊ぶと、暴れると叱られますからお隣にうかがうわけです。そうすると、ご近所からたくさん子どもたちが集まるわけで、大騒ぎをするんですね。

昔の住宅ですから、和室がいくつかございます。ふすまや障子を全部取り払ってしまって、ずーっと広い部屋ができます。畳を全部上げて、畳をこういうふうに立てかけて、トンネルのようなものができます。トンネルを

二つに作って「ヨーイドン」で（くぐりぬける競争をする）。本当に本当に面白くてドタバタ大騒ぎをしますと、こちらの奥様、とてもエレガントな方なんですけれどもね、時々出てらして、「まあにぎやかなこと」とかおっしゃって私の顔をご覧になって、「まあ今日はお嬢さんまで遊びにいらしているの？」なんて、ニコニコしてひっこんでおしまいになる。すっかり子どもを叱ることもしつけることも、ちょっと放棄しているとしか思えないような感じでした。

子どもとしては好き放題遊んだ後、お腹が空きますから、「お腹が空いた」と言う。ところがおやつなんて出てこないのです。私の家なんかですと、友達と遊んでいると母が適当な時間におやつを用意してくれるのですけれども、そちらの奥様、何もなさらない。子どもたちが「家捜し」をするわけですね。よそ様のお家なのですけれども、（何か食べるものはないか）捜すわけです。何もない。しょうがない、ご飯を炊こうということになりまして、炊飯器がない時代ですから、お米を研いで男の子たちがご飯を炊きます。半煮えくらいのご飯ができかけて、それにケチャップをかけて食べたり、マヨネーズをかけて食べたりするわけです。私は神経質な母に育てられましたから、普段は神経質な子で、そんな汚いものは食べないのです。（けれども）その日だけは本当に美味しくて、半煮えのご飯に、ケチャップをかけたのを食べて、満足して家に帰って、口の辺りにケチャップがついていて、母に叱られたりいたしました。

そういうことって考えてみれば、「子どもの目線と子ども的な感覚、子ども的な生活のし方に対して、寛容」の、別に勉強して寛容の精神を体得したというのではないのですね。自ずから、あの許容性大の性格ができあ

がっていく。そしてお子さんが全部成長なさってからは、お隣の家もきれいになりましたから、元々だらしない方ではなかったのだと思います。その時はちょっと諦めて、まあまあ好きなようにさせておきましょうと、そういう気持ちがご両親に自ずから身についてしまったのだろうと思うのです。

効率性と合理性優先の現代社会の子ども観

ところが先程申し上げましたように、子どもが少ない社会ではその逆でございますね。おおらかな子どもを許す、子どもの、大人とは違ういろいろな厄介な行動をおおらかに認めるという感情が、どんどんどんどん薄れていくということになります。そして、大人的なルールできちっと物事を処理するという生活がいつの間にか身についてしまっていて、勿論大人というのは何でも手早くできますし、それから今は非常に効率優先の時代ですから、なるべく効率的に、合理的に行動しよう、物事を処理しようとする。

それに対して子どもはそうではないので、とっても厄介で、手がかかって、面倒くさくて、「自分の生活を乱す存在」として見えてくる。これは子どもに対してだんだん、「子どもって嫌だな、なんでこんな変なものが私の家にいるんだろう」というような感覚をよんでいくことになる。

そういう時代に突入しはじめるのが一九七〇～一九八〇年の動きだったろう。そうすると、そういう中で子どもはたぶん幼稚園に来ても、かなり今までとは何か違った言動、あるいは違った感覚を発生させたのではないか。その頃は、まだそんなことを取り立てて考えていなかった（のですが）。「子どもが減りはじめた」「子ども社会全体を、子どもを見る目が変わりはじめた」なんて誰も言わなかったし、誰も気がついていなかったけども、（例えば堀合先生のように）子どもと向き合っている方としては、何となく気づいておしまいになった。そ

して、「子どもたちがこう変わってきたのに、今までと同じような名人芸を披露していてはよくないのではないか」、という反省が堀合先生の中に湧きおこっていらした。そんな時代であったかな、と今改めて思い起こされました。

ただ、どのようにご自分の保育を変えていらしたかは、ご自分の口からおっしゃられた以上のことはございませんから、私が敢えて解説じみたことを申し上げる必要はないと思います。

日本の子どもの歴史の転換期一九七〇年～一九八〇年② 都市生活のはじまり

それからもう少し、子どもたちを変えてしまったものを挙げていきますと、都市型生活というと、すぐ「遊び場がなくなった、昔は道路で遊べた」などと、おっしゃいますが、確かにその通り。一九六六年に道路で遊ぶことが規制されはじめた。モータリゼーションのはじまりです。自動車が都会の真ん中を走り回るものですから、子どもたちは道路で遊ぶことができなくなった。空き地という空き地には住宅が立ちはじめますから、遊び場がなくなったという生活の中に追い込まれていきます。

住環境の変化を探ってみますと、面白いのです。今、部屋の構造を考える時、皆さんは無意識のうちにと申しますか、無条件的にと申しますか、「ＬＤＫ」というものを考える。お台所があって、リビングダイニングみたいなお部屋があって、それ以外に寝室があって、余裕があれば三つくらいのお部屋があって、なんていう構造を何となく考えてしまいます。ところが、このスタイルがはじまるのが、一九六〇年くらいからなのですね。一九五五年に、日本住宅公団が二ＤＫの団地をあちらこちらに建てました。

そして、団地の主たる目的が「寝食分離」だった。寝室と食堂を別々にいたしましょう。

子ども部屋の設置による居住空間での「大人と子どもの分離」

それを追いかけるようにしてできたのが、「大人と子どもの分離」。子ども部屋を作って、子どもは子ども部屋で眠るようにいたしましょう。これは、アメリカ式生活スタイルの導入だということができますでしょうか。日本では、子どもと大人がわりとごちゃごちゃと密着して暮らしていたわけです。「添い寝」というのは母親の得意芸であって、赤ちゃんと一緒に母親は同じお布団で寝るということをいたしましたね。「添い寝」というのは止めた方がいいというような指導がアメリカの方から入って参りまして、それを実行するためには住居がそのようでなければならない。寝食分離で、寝るお部屋と食堂を分離するということ、大人の居住空間と子どもの居住空間を分離するということは、合理的な新しい生活スタイルとして日本に入ってくるのが一九六〇年から一九七〇年にかけてということになります。これはいつの間にかすっかり定着してしまいまして、私たちはＬＤＫ抜きに、家の設計をすることが難しいくらい洗脳されてしまったわけですね。

それから子どもが非常にたくさん生まれた、一時的ですけれども、ベビーブームという時期がございまして、子どもがたくさんいれば当然、受験競争が起こりました。たくさんの子どもが高校へ進学しようとすると、高校の数が足りないから受験競争が激しくなる。大学にいこうとすると、大学の数が足りないから受験競争が激しくなる。そして、子どもたちは受験勉強をしなければならない存在に変わってきますから、何としてでも子どもには、「立派な子ども部屋」を用意しなければならなくなってきます。

戦争前でございますと、子ども部屋を持っている、子ども部屋を用意している家庭は、中流の上でしょうか、かなり経済的にも豊かでステータスも高い、というお宅

が、お子さんのために子ども部屋を用意なさる。そこそこ経済的に豊かであっても、子ども部屋など敢えて用意しないで、廊下の隅っこに机を置いて、そこで勉強するということがあったように思います。私なんかも兄は子ども部屋を貰ったのですけれど、私は二番目だったせいか、小学校に入った時、廊下の片隅に机と椅子を置いてもらって、そこで勉強したり、勉強しないで母のところにいって、ペチャペチャ喋ったり、そんなことをしながら成長したように思います。

「学歴社会を実践する子ども」への期待

ところが、そういうゴチャゴチャが、立派な子ども部屋を提供することで、無くなっていくわけですね。そして、子どもが二人いると二つ子ども部屋を提供しなくてはならない。そうするとご両親が寝る場所がなく、リビングルームのソファーベッドを広げて、夜は寝るなんて、ご両親の方が犠牲になって、ちょっと小さくなっているというような生活が、珍しくなくなっていくわけですね。

そうなってまいりますと、子どもたちはとにかく塾なんかに通って、学校以外のどこかへ通って勉強して、いい大学に入る存在、つまり「学歴社会を実践する存在」として、子どもが位置づけられてしまう。大人と子どもの関係はそういう形に変わってまいります。ご存知のように、一九七〇年くらいから少子化がはじまるのですけれども、一度洗脳されたらというのでしょうか、「子どもたちは大変な受験競争をくぐり抜けるのだから、小さい時からしっかり勉強させなければならない」という、親子の関係の結び方は（現代も）変わらないのですね。

私はよく、「これから大学全入時代になって、誰でも大学なんか入れる、格を選ばなければ受験勉強なんかしなくてのんびり過ごしたっていいわけでしょ」と申し上

げるわけですけれども、やっぱり幼稚園、小学校くらいからいい学校に入ろうという熱は衰えないわけでございますよね。中・高一貫の私立学校の人気が高いとか、都立の学校までも中・高一貫に切り替えるとか、いろんなことをはじめております。

つまり、学歴社会というのは、非常に強固に日本に根づいてしまって、もう変わらなくなってしまった。その中で子どもたちも、非常に小さい時から幼稚園以外にも塾に行ったり、お稽古に行ったりして、今までと違う生活を余儀なくされはじめるのが一九八〇年以降と申し上げたらよろしいでしょうか。

そうなってまいりますと、幼稚園なんかでも、子どもたちが大変変わってくる。幼稚園は、休憩に来ていて、これからお稽古に行くとか、塾へ行くという方が、ちょっと高級であるというような逆転現象さえ起こってくるのが、この頃からではないかと思う。

こうなってまいりますと、今までと同じような考え方で子どもと一緒に遊びながら、何かを見つけて誘導していこうとすると、どうもうまくいかない。誘導しようとすると、かなり強力な力で教師が引っ張らなければならなくなるのも、当然かなという気もいたします。

日本の子どもの歴史の転換期一九七〇～一九八〇年③　家庭内の電化のはじまり

少子化とか住環境の変化とか申し上げましたけれど、面白いことに家庭電気製品が非常に発達いたしました。これによって、主婦が暇になったから、子どもにメチャクチャにエネルギーを注ぐのだということは、しばしば指摘されます。それはその通りですけれども、それ以外にも、家庭内が電化されたということはいろんな大きな影響力を持ちます。

例えばお風呂が自動的に点火できるようになる。そして、ボタンを押せば熱いお湯が沸くとか、あるいは、蛇口からお湯が出てくるとかいうような方向に変わってまいります。そうすると、一人でお風呂に入れる時代がやってくる。入ろうと思えば一人で蛇口をひねって、浴

槽にお湯を満たして、そこに入ればいい。親が世話をしなくてもいい。放っておいても、子どももご主人もお風呂に入る。

ご主人なんか遅く帰っていらして、昔でございますと、誰かがお湯を沸かして温めてあげなければならない。奥さんなり、子どもなりがお風呂に火をつけてあげるとか、薪をくべるかする。そうすると、中から、お父様ならお父様、ご主人ならご主人が、「熱いよ」とか、「ぬるい」とか、いろいろおっしゃる。ぬるければもう少し燃さなくてはいけない。ここで、親子の関係が自ずからできあがって、家族というのは、そういう形で、つまらないところで、お互いに支えあって生きていたわけですね。ところが一人で帰ってきて、どんなに遅く帰っても、足音を忍ばせて浴室に入って、他の人が目を覚ましさないようにお湯を満たして、静かにお湯に入ってしまえば、ご主人が帰ってきたか帰ってこないかさえ、気がつかない、そういう時代になったわけなんですね。

洗濯機もそうですね。さっき私は、母親が身ぐるみはいで盥で洗ったと申しましたけれど、あの頃は盥で洗っておりましたから、子どもが何をしてきたかわかるわけです。例えば、もし子どものエプロンにいつもと違って血でもついていたら、「どうしたのこれ」、と聞くことができるのです。ところが、今遅く帰ってきた子どもが、洗濯機に自分の衣類を入れて洗ってしまいますと、子どもが外で何をしてきたかということが、全くわからない生活が展開されるわけですね。

私は、前に神戸の酒鬼薔薇事件の時に、「あれだけのことをした少年が、おそらくGパンなんかに血がついていたに相違ないけれども、なぜ家族が気がつかなかったのだろう」と、大変不思議に思ったことがあるのです。が、考えてみれば、帰ってきて洗濯機に自分で入れて洗ってしまえば、わからないわけですよね。家庭内が徹底的に電化されるということは、好むと好まざるにかかわらず家族の絆をバラバラに切っていくということであったわけです。

基本的生活条件の「超近代化」に伴う、大人が子どもに「手をかける」方向の変化

家族の崩壊とは、もっともっといろいろ複雑な原因がございますけれども、単純に電化製品がここまで普及したことも、家族関係を変えたのではないかと思ったりいたします。子どもたちがそういう中で、母親のエネルギーが余っている、過剰に子どもに手をかけたい。しかし、基本的な生活性みたいなところ、例えば、汚れたものを洗ってあげるとか、食事の時にさめたものを温めてあげるとか、基本的な生活のところで手をかける必要がなくなってしまいましたから、そういうのは極めて簡単にできるようになってしまいましたから、母親の子どもに対する手のかけかた、エネルギーが余った母親が、子どもに手をかける時、何に手をかけるかというと従来とはかなり違った方向が出てきてしまったということになります。

そして、母親の余ったエネルギーは、子どもに、いわゆる教育とでもいうようなものを早くから学ばせることとか、そういう方向にエネルギーが向いていく、これも当然であろうかと思います。ですから少子化にしろ、都市型生活にしろ、家庭内電化にしろ、今まで起こってきたさまざまなことは、大人と子どもの関係を変えていったんだ、ということになってくるわけですね。

情報化などというのを付け加えれば、大きな問題になってしまいますでしょう。とにかく、子どもはそうやって、どんどん変わってしまった。誰が悪いと責めることもできない。家庭が悪いとか、母親が悪いとか、原因を特別なところに転嫁して、非難しようとする空気がございますけれど、これはちょっと見当外れで、社会全体の近代化を超えて、超近代化とでも申しますか社会全体が超近代化へ向けてひた走りに走ってきたその動きの中で、大人と子どもの関係が変わらざるを得なかった、ということだけ指摘させていただき、ここで区切りをつけたいと思います。

〈次号へ続く〉